

## 第 5 回「生ごみ等の 3 R・処理に関する検討会」において指摘された エネルギー利用の現状及び課題等に関する主要な論点

### 1. メタン発酵施設・BDF等をめぐる指摘

#### (1) メタン発酵施設

生ごみを分別すると残ったごみの質が良くなるということを市民に理解してもらう必要がある。

メタン発酵システムの成立のポイントは売電価格、ごみ質、収集形態、水処理、処理費の有料化である。

都市部では生ごみの分別収集をしても徹底は難しいため、メタン発酵が適しているのではないかと。

コスト比較の前提を整理して再度提示し直す。

#### (2) BDF

精密機械である自動車の燃料に用いるために廃食用油を手間及びコストをかけて BDF 化するのは、技術的には不合理。

BDF 化の意義は、市民が自分たちの見える形でリサイクルに取り組むという点にある。また、日本では自動車用燃料の石油依存性が高すぎるという背景があり、BDF 化、エタノール化が重視されている。

#### (3) その他

新エネルギーの目標値を高めを設定するような政策的誘導が必要ではないか。また、新エネルギーを高く買ってもらうという RPS 法の見直しについて、強く情報を出していく必要がある。

### 2. 処理システムをめぐる指摘

#### (1) 地域性

今後、地域の特性による処理システムの選択が重要になるので、選択の基準を考えていくべき。また、様々な視点、論点があるのでそれらを整理したうえで地域性とは何かを議論するのが良い。

自治体のごみ処理体系の見直しも合わせて行う必要がある。

日本全体で同じシステムは無理であり、地域特性は重要である。フードチェーンに戻しやすい地域やそうでない地域などがあり、地域特性、地域事情として何を考慮すべきか検討しなければならない。その際、脱化石燃料化、温暖化効果とその評価の指標になる。

## ( 2 ) 処理システム

行政単位での取組みでは処理システムが限定されるのはやむを得ないが、小さな地域や集団での取組みが阻害されない配慮もほしい。

全体の処理システムをどう考えるかという視点が大事である。処理技術システムだけでなく、ごみ質の変化によるごみ処理の視点、アウトプットのマーケット、食物の循環など処理システムを一体として考える必要があり、インプット、アウトプット、処理装置、運営主体、地域特性等の背景・広域化等の要因について議論すべきである。

大原則として原材料化、次にエネルギー利用という処理システムの考え方で良いし、コンバインドシステム等の考え方も良い。あとはそれをどう根付かせるかという仕組みの問題である。

## ( 3 ) ネットワーク

自治体単独では生ごみのリサイクルは難しいところもあり、市町村間の連携など様々な仕組みをトータルで発信及び起動していく全国的なネットワークが必要である。その場合、ネットワーク化をコーディネートするような組織、NPO などが必要ではないか。

ネットワーク化するにあたっては、情報交換し、お互いに学びあうことが重要であり、無理に組織をつくるよりは、スタートとして情報共有できる状況を整える、応援する程度の広く緩やかな形で良いのではないか。

ネットワーク構造は、これまでのヒエラルキーと異なり、平面的な広がりでの情報伝達が早いのが良いところ。また情報だけでなく、人、物、金がリンクする仕組みづくりが必要である。

専門家の参加や顔の見える関係などといったことは、これまでのごみ処理システムの中においては必要なかったことだが、そういう意味で、これからはネットワークからの情報発信というのは重要である。